

# 論 点

## どう見る熊本地震

熊本、大分地方を襲った大地震は、改めて日本が地震列島であることを多くの人に知らしめた。激しい揺れは今も続く。それも同時に多発的に、徐々に範囲を広げながらある。列島の下で何が起きているのか。いま、大地震から学ぶ教訓があるとすれば何なのか。3人の専門家に異なる視点から語ってもらった。

**3地域で同時多発**

14日夜、熊本県でマグニチュード(M)6.5の地震が発生し、益城町で震度7を観測したのをはじめ、熊本、大分両県で地震が続発している。本震は16日未明に熊本県で発生したM7.3の地震。県内を走る布田川、白奈久両断層帯付近を中心に、2県の3地域で同時に多発的に別々の地震が起きているとみられる。18日正午現在、震度1以上の地震は531回を数えた。地震による死者は40人を超えており、建築物にも多くの被害が出た。

濱口 和久

防災教育推進協会事務局長

はまぐち・かずひさ  
1968年、熊本県生まれ。防衛大卒。陸自官、栃木市首席政策監（防災危機管理担当）などを経て、2013年に防災検定協会（現・防災教育推進協会）を設立。拓殖大客員教授。



地震の震源地に近い熊本県大津町で生まれ育った。幸い、両親や身内は無事だったが、実家も屋根などにひびが入り、両親は避難所生活を続けている。日本の地方の家屋は台風に備えて重い瓦があることが多いが、地震の時にはこれが壊れてしまう。

19歳まで地元で育ったが、これまで天災というと、日々活動が盛んな阿蘇の噴火であり、梅雨や台風によって発生する水害が心だった。そうした災害に対しては心の備えをしているが、直下型の地震は経験もなく、昔話にも聞いたことがない。熊本は大地震とは関係がないと思っている住民がほとんどだっただけに、心理的な不安が広がっているようだ。

また宇土市役所や熊本空港ビルなど、本来は防災対応の拠点となるべきもの、熊本城が壊れたことのショックが大きい」という声も聞いた。今後、観光面への影響が長期化されることも心配だ。

熊本という地方都市でも、これが被書になつたということは、これがもし、もっと人口が多い大都市や首都直下型が発生した場合はどういう事態が想定されるか。国民全体が意識を高めるきっかけ

地震の震源地に近い熊本県大津町で生まれ育った。幸い、両親や身内は無事だったが、実家も屋根などにひびが入り、両親は避難所生活を続けている。日本の地方の家屋は台風に備えて重い瓦があることが多いが、地震の時にはこれが壊れてしまう。

19歳まで地元で育ったが、これまで天災というと、日々活動が盛んな阿蘇の噴火であり、梅雨や台風によって発生する水害が心だった。そうした災害に対しては心の備えをしているが、直下型の地震は経験もなく、昔話にも聞いたことがない。熊本は大地震とは関係がないと思っている住民がほとんどだっただけに、心理的な不安が広がっているようだ。

また宇土市役所や熊本空港ビルなど、本来は防災対応の拠点となるべきもの、熊本城が壊れたことのショックが大きい」という声も聞いた。今後、観光面への影響が長期化されることも心配だ。

熊本という地方都市でも、これが被書になつたということは、これがもし、もっと人口が多い大都市や首都直下型が発生した場合はどういう事態が想定されるか。国民全体が意識を高めるきっかけ

## 教訓 きちんと継承しよう

としてほしいと思う。東日本大震災から5年が経過し、一部で「風化」が指摘されている中で、今回立てる教訓は小さくない。

例えば、今回、犠牲者が出了原因の一つが家具の転倒だった。家具がつぶれなくても、重いタンスが倒れて動けなくなつたお年寄りが続いて起きた地震で命を落としたケースがあったという。家具の固定は不可欠だ。水や食料はもちろん、困っている人が多いのがトイレの問題だ。避難生活が長引く中で何が本当に困るのかを、常に自分のこととして想像することが必要だろう。それらの教訓は過去の悲劇から学んできたはずだが、きちんと継承されていない。その点が防災を考えるうえで大切だ。

私たちの組織は、東日本大震災の教訓を将来に生かすため、一線の地震学者や教育関係者を中心にして何が本当に困るのかを、常に自分のこととして想像することが必要だろう。それらの教訓は過去の悲劇から学んできたはずだが、きちんと継承されていない。その点が防災を考えるうえで大切だ。

私たちの組織は、東日本大震災の教訓を将来に生かすため、一線の地震学者や教育関係者を中心にして何が本当に困るのかを、常に自分のこととして想像することが必要だろう。それらの教訓は過去の悲劇から学んできたはずだが、きちんと継承されていない。その点が防災を考えるうえで大切だ。

災教室内を開き、専門家を派遣して地震や津波、台風、水害などの天災に普段から備えることの重要性を伝えている。また小中学生を中心とした「ジュニア防災検定」は、2013年に発足した。全国で防災知識を再認識してもらうことを目的としている。延べ1万人以上が受検したが、一人一人が震災の教訓を胸に刻んだと確信している。

「天災は忘れたころにやってくる」という格言通り、大地震が起きた直後は備えるが、被災地から遠い地域ではすぐに忘れてしまうのが人間だ。しかし、これまで地震とは縁が薄いと思われていた熊本でこれほどの地震が続き、被害が出たことは、日本列島では例外なく、いつどこでどんな地震が起き、被害が出ても不思議ではないということを意味する。

まずは被災地の救援、復興が最優先だが、その他の地域もこれを貴い教訓にして防災の知識を備えてほしい。

【聞き手・森忠彦、写真も】